

アメリカ進歩主義教育運動における コミュニティと学校

—1910年代のゲーリースクールの研究—

教育哲学・教育史研究室 宮 本 健市郎

The School and the Community in the Progressive Education Movement

—A Study of the Gary Schools in the 1910s—

Kenichiro MIYAMOTO

In this paper, I aim to illustrate the social functions of the progressive education movement, focusing on the Gary Schools. The analysis of the Gary Schools will prove that

- (1) the progressive education movement in the 1910s appeared to be making every effort to construct a community;
- (2) as a matter of fact, the movement created “social order” instead of “community.”

The Gary Schools at that time, which were praised highly by many educators including John Dewey, were among the most famous and influential progressive schools. Shortly after U.S. Steel set up a factory at the south shore of Lake Michigan, the place was named Gary and experienced a rapid growth of the population. The city became crowded and disordered by many newcomers, most of whom were immigrants from East and South Europe. Educators in Gary convinced the people that the schools were making every effort to construct a “community,”—to give the people autonomy, to form their attachment for the place, and to establish a personal relationship, by minimizing the social and racial conflicts in Gary. But the fact was that the educators sought for social order via the public schools, using the word “community” instead of “order.” In consequence, the Gary Schools, as community centers, provided the people help and support at the expense of the autonomy of the people. The people in Gary believed that the schools were always on their side. In fact, they were under an illusion.

目 次

- はじめに
- I. ゲーリースクール出現の背景とプランの概要
 - A. 背 景
 - B. ゲーリープランの概要
- II. コミュニティ建設と確保のための学校教育
 - A. 学校内でのコミュニティ精神の育成
 - B. 学校と地域の連結
 - C. 学校に対する住民の信頼

- III. ゲーリースクールの実態
 - A. 管理・運営上の諸問題
 - B. 教育的効果
- IV. ゲーリースクールの評価
- おわりに

はじめに

ゲーリースクールは、1910年代のアメリカ合衆国において、国民の大きな注目を集め、また、全国各地に強い影響を与えた学校である。ジョン・デューイは、1915年

「(ゲーリースクールは)その訓練において小社会であり、民主主義社会である⁹⁾」と絶賛した。1914年と1922年には、合衆国教育局報告書の中で、ゲーリースクールが特集された¹⁰⁾。こうした紹介に触発されて、各地の学校が、ゲーリーに倣った教育改革を実施し、1922年には、ゲーリー式の教育をとり入れた都市の人口を合計すると、全国総人口の $\frac{1}{10}$ に相当した¹¹⁾。わが国へは、田中廣吉、阿部重孝らによって、紹介されている¹²⁾。

本研究は、1910年代のゲーリースクールの社会的機能を解明したものである。1900年から1920年までは、アメリカ史上、「革新主義時代(Progressive Era)」と呼ばれる、広範な社会改革が行なわれた時代であって、その中には、政治改革、経済改革、市政改革などとともに、教育改革も含まれていた。1910年代にゲーリースクールが注目を集めたのは、その改革が、政治的、経済的な改革としても、意味をもっていたからである。この時期のゲーリーの教育改革は、全国的な社会改革運動の一部として、捉えられなければならない¹³⁾。

ゲーリーの学校関係者は、ゲーリーを住みよい「コミュニティ¹⁴⁾」にすることを、つねに意識していた。ゲーリープランの考案者であるワート教育長は、「学校がコミュニティである以上に、コミュニティが学校であること¹⁵⁾」を求め、「都市が子育てのための適切な場所になること¹⁶⁾」を期待した。学校は、地域住民が積極的に利用できるように、広く一般に開放された。

このように見てくれば、コミュニティと学校との関連という視点からゲーリースクールを捉えることは、ゲーリースクールの分析として有効であるだけでなく、アメリカの進歩主義教育と社会改革との関連をも解き明かすための有効な手がかりになるはずである。

ゲーリースクールを扱った研究は、わが国では、大田堯、笠原克博、杉峰英憲らのものがある。それぞれ、ゲーリースクールに、営利企業体としての性格、民衆救済の意図、社会改革への指向、などを見出している点で、視点は示唆に富んでいる。とくに笠原の研究は、アメリカ社会の変化と進歩主義教育の流れの中にゲーリープランを位置づけており、すぐれている。しかし、いずれの研究も、ゲーリースクールが結果的に、住民統制の手段となったことを見逃している。

アメリカでは、クレミンのように、ゲーリースクールの社会改革への努力を評価する立場のものと、カラハンのように、社会統制的機能と効率の追求とを強調する立場のものがある¹⁷⁾。しかし、いずれも、分析が不十分であるうえに一面的である。それに比べると、コーエンとモールの研究は、群を抜いて詳細である。彼らは、ゲー

リースクールに民衆救済と民衆統制の両面があったことを実証している。が、ゲーリープランの理論的分析は不十分である。

本論文では、ゲーリースクールが社会改革にどのような形で関与していたのかを、学校とコミュニティとの関連に注目して、解明していく。ゲーリープランが改革としてもっていた意味と、その欠陥について、教育の内容・方法に立ち入って、検討していきたい。

I. ゲーリースクール出現の背景とゲーリープランの概要

A. 背景

ゲーリー市は、シカゴの南東27マイル、ミンガン湖南岸にあって、鉄鋼生産で有名な町である。1906年に、U. S. スチールの工場が誘致されてから、町は急速に発達した。1906年には数百しかなかった人口が、1910年に17,000人、1920年には55,000人に達した。この急激な人口増加は、南欧・東欧系の新移民が工場労働者として、ゲーリーに集まったためであった。外国系移民(本人または両親のいずれかが外国籍をもつ)の割合は、1910年に70%、1920年に60%であった。

ゲーリーはたいへん貧しい町で、都市計画も全くなかった。住民の大半を占める移民は課税の対象となる財産をほとんど持っていなかった。頼りになるのは、U. S. スチールからの寄附であった。町を開発したのは、U. S. スチールの会社役員、市長トム・ノッツ(Thomas Knotts)、その他の政治家であった。彼らは互いに結びついて、自らの利権獲得に奔走した。町はミンガン湖畔にU. S. スチール工場、その南がノースサイド、さらにその南がサウスサイドとして、画然と区切られた。ノースサイドは、シカゴから出張してきた会社役員、地方官吏、熟練労働者のための高級住宅街であった。一方、サウスサイドは非熟練労働者が住みつき、収入の少ない労働者のスラム街であった。こうしてゲーリーは、まとまりのない無秩序な町になっていた¹⁸⁾。

ゲーリースクールの課題は、この無秩序で貧しい町を、能率的に住みよい「コミュニティ」にすることであった。町の指導者にとってアングロ・サクソンの価値観を知らない移民は、不道德な民衆としか映らなかった。ゲーリーに秩序を築くためには、彼らをアメリカナイズして、善良な市民へと育てることが必要であった。しかも、市財政は全く苦しいうえに、人口は急速に増えつづけていた。市が学校にかかる期待は非常に大きかった。こんな時、W. A. ワート(Wirt)が、ノッツの招きで、

1906年10月に教育長となった。彼はシカゴ大学でデュエーイの講義を受けたこともある、若い教師だった¹³⁾。

1909年にエマーソン校が、1912年にフレール校が開かれた。いずれも印刷室、鋳造室、溶鉱炉、作業室、プール、講堂、体育館などをもち、豊かで近代的な設備として、全国に知られた。ジェファソン校はこれより先、1907年に開かれており、旧式の校舎を利用しつつも、工夫をこらしてゲーリープランを実行していた。ゲーリー市には他に6校が開かれたが、いずれも規模が小さく、建物も旧式でゲーリープランを実行できなかった。本論文では、ゲーリースクールとは、ゲーリープランを実行していた学校をさすことにし、エマーソン校、フレール校、ジェファソン校を中心に扱うことにする。

3つの学校の大きな差は、生徒の人種構成にあった。それはエマーソン校とジェファソン校がノースサイドに、フレール校がサウスサイドにあることを、そのまま反映していた。各地区の21歳未満の青少年のうち、本人または両親ともが新移民である者の割合は、エマーソン地区、ジェファソン地区とも10%であるのに対して、フレール地区では75%であり、圧倒的に新移民が多か

った¹⁴⁾。

3つの学校にはこのような差があったが、どの学校も、ゲーリーを安定したコミュニティにしようと努力していた点では同じであった。雑多な人種の集合であるフレール地区をアングロ・サクソンのコミュニティにすることは、フレール校の課題であった。エマーソン地区とジェファソン地区は、主にネイティブホワイトが住んでいたため、人種的同質性は確保されていたが、そこに長く住む者は少なく、シカゴからの出張者が多かった。しかも、通りの向こう側には、「不道德」な移民が住んでいたため、親密な人間関係のない不安定なコミュニティであったことに変わりなかった。エマーソン校とジェファソン校の課題もまた、伝統的なアングロ・サクソンのコミュニティをつくることであった。

B. ゲーリープランの概要

世界的な注目を集めていたゲーリースクールが、学校見学者のために用意していたパンフレットには、ゲーリープランの特徴として、①豊かな設備、②ソーシャルセンターとしての学校、③子どもにとっては生活と結びつ

表1 1日のプログラム

Time	Regular Studies				Time	Special Studies			
	Class-room I	II	III	IV		Basement Garden Attic Auditorium Workroom Laboratory	Playground		
8:45-10:15	1 A	2 A	3 A	4 A	8:45- 9:30	1 B	3 B	2 B	4 B
10:15-11:45	1 B	2 B	3 B	4 B	9:30-10.15	2 B	4 B	1 B	3 B
1:00- 2:30	1 A	2 A	3 A	4 A	10:15-11:00	1 A	3 A	2 A	4 A
2:30- 4:00	1 B	2 B	3 B	4 B	11:00-11:45	2 A	4 A	1 A	3 A
					1:00- 1:45	1 B	3 B	2 B	4 B
					1:45- 2:30	2 B	4 B	1 B	3 B
					2:30- 3:15	1 A	3 A	2 A	4 A
					3:15- 4:00	2 A	4 A	1 A	3 A
	V	VI	VII	VIII		Science	Manual Arts	Music Drawing Literature	Play
8:45-10:15	5 B	6 B	7 B	8 B	8:45- 9:30	5 G	7 G	6 G	8 G
10:15-11:45	5 G	6 G	7 G	8 G	9:30-10:15	6 G	8 G	5 G	7 G
1:00- 2:30	5 B	6 B	7 B	8 B	10:15-11:00	5 B	7 B	6 B	8 B
2:30- 4:00	5 G	6 G	7 G	8 G	11:00-11:45	6 B	8 B	5 B	7 B
					1:00- 1:45	5 G	7 G	6 G	8 G
					1:45- 2:30	6 G	8 G	5 G	7 G
					2:30- 3:15	5 B	7 B	6 B	8 B
					3:15- 4:00	6 B	8 B	5 B	7 B

注 1) Burris: op. cit. pp.13-14

いた楽しい学校, ④合理的な管理運営, の4点があげられている¹⁵⁾。

学校の設備は近代的で, 全国でも珍しいほどよく整っており, また, 道路や公園と同じように, いつでも誰でも, 利用できた。公立学校はあらゆる人々に開放されるべきであり, 「私たちが集団としてその設備を多角的に利用する¹⁶⁾」ことができなければならない, というのがワート教育長の信念であった。学校はソーシャルセンターとしての機能をもたされた。

学校は子どもたちにとって, 生活と結びついた楽しい場所になるように, 計画された。伝統的な暗誦中心の学校ではなく, 子どもは講堂, 図書室, 作業場, 運動場などを動きまわる。実生活から遊離した教育にならないように, 現実的な要求に基づいた作業が重視された。例えば自分の着る服を作ったり, 学校で使う机を作ったりす

る。「学校は子どもに仕事場や運動場を与えるのではなく, 生活を与えている¹⁷⁾」とワートは語っている。

ゲーリースクールの最大の特徴は, 能率的管理にあった。働き・学び・遊ぶ学校 (Work-Study-Play School) とも言われたゲーリースクールは, 1人に1つの机という考え方を棄てた。全校の生徒は普通教室, 理科実験室, 講堂などにうまく配分されていて, 時間ごとに回転していく。こうして子どもたちは, 学び, 働き, 遊ぶことを順々にこなしていき, あらゆる設備は無駄なくつねに使われていることになる。具体的には表1のようなプログラムが組まれている。

以上の4つの特徴の他に, カリキュラムが拡大されていることも見逃すことができない。伝統的な学校は「学ぶこと」にほとんどの時間を費していたが, ゲーリーでは, 「学ぶこと」に費す時間を減らさないで, 「働くこと」

表2 年間の時間数ゲーリーと他市との比較

Comparison of Annual Time Allotment of Gary and of Fifty Representative Cities

Subjects	Average number of hours allotted in Gary	Average number of hours allotted in 50 cities	per cent. of total elementary time in Gary	per cent. of total elementary time in 50 cities
The Three R's:				
Reading	1,323	1,280	12	15
Language	798	864	7	10
Spelling	496	482	4	6
Writing	329	388	3	5
Arithmetic	958	1,008	9	12
Total	3,904	4,022	35	48
The Fundamentals:				
The Three R's	3,904	4,022	35	48
Geography	238	539	2	6
History	339	496	3	6
Science	567	331	5	4
Total	5,048	5,388	45	64
Special Subjects:				
German	62		1	
Music	188	367	2	4
Auditorium	1,600	899	14	11
Drawing and Manual Training	1,605	887	14	10
Physical Training and Play	2,697	927	24	11
Total	6,152	3,080	55	36
Total	11,200	8,468	100	100

注 1) Flexner/Bachman: op. cit. p. 230.

と「遊ぶこと」の時間をつけ加えた。当然、開校時間は長くなる。ゲーリースクール（3校平均）と、国内の代表的な50の都市の学校との、年間授業時間数を比較すると、表2のとおりゲーリーでは特別教科の時間数が特に多いのがわかる。

では、このような特徴をもったゲーリースクールが、なぜ、コミュニティの建設と確保に貢献できるのか、次章で見てみよう。

II. コミュニティ建設と確保のための学校教育

この章では、ゲーリープランの目的と方法を理論として見ていき、最後に学校とコミュニティが実際に、強い信頼関係にあったことを示す。

A. 学校内でのコミュニティ精神の育成

アメリカの伝統的コミュニティの要素として、住民の人種・宗教的同質性、住民間の親密性、土地への愛着、住民自治は欠くことのできないものであった。ゲーリーでは人種・宗教的同質性は居住区を分けることで、形の上では確保されていた。ゲーリースクールの役割は居住区間のコンフリクトを和らげるために、移民をアメリカナイズすることにあった¹⁸⁾。

住民の親密性、土地への愛着、住民自治を確保するうえで、ゲーリースクールは有効であるはずだった。ゲーリープランでは、①教育内容を地域の生活と密接に関連づけ、土地への愛着を育て、同時にアメリカニゼーションをすすめる、②生徒間に友愛精神を育成し、親密性を増す、③教育内容の実用性を重んじて、生徒が一刻も早くコミュニティの一員として活躍できるようにする、④校内での生徒自治を認める、という方法によって生徒の中に、コミュニティ精神を育成しようとしていた。以下、順に見ていく。

1. 教育内容と地域社会の関連

ゲーリープランでは、教育内容がゲーリーの地域社会を中心に構成されている。地理と歴史は自分のゲーリーでの生活と広い社会的背景とをできるだけ関連づけるように編成され、同時に教えられることも多かった。例えば、「都市を住みよい健康的な場所に——公園の強調」というような、身近な問題がトピックとして、とりあげられた。教室には子どもたちが自分で作った地図、海図、ニュース板などが掲げられていた。現実の社会とかかわりの薄い古代史はわずかである¹⁹⁾。

化学の実験では、その素材をゲーリーの町からとり、現実の生活に役立たせた。生徒が自ら、ゲーリー市の水

質検査、食物検査、細菌検査などを行い、その結果を報告書として発表した。「エマーソン校実験室は、市の化学実験室の延長」とまで言われた。また、ゲーリーで採れる石炭を素材にして、その成分を調べたり、子どもがたまたま拾ってきた鉄鉱石を皆で精錬の実験に使ったりもした。日常の自分の経験をもとに教育がすすめられるので、生徒は理科の実験には強い興味をもっていた²⁰⁾。

こうした活動を通して、生徒はゲーリーの町についての理解を深めていき、愛着をもつように指導された。

2. 友愛精神の強調

コミュニティができるためには、親密な人間関係がなければならなかった。ゲーリーでは、生徒間の友愛精神を育てることで親密な人間関係を確保しようとした。

ゲーリースクールの各学校の校舎は、1年生から12年生までいっしょに使う。そして、年長者と年少者との友愛精神を促すために、ヘルパー制が用いられた。ヘルパー制とは、年少の者（主に4年生と5年生）が年長の者のする作業を手伝いながら、技術を教えてもらうものである。「学校は大きな家族と見られており、そこでは年少者は意識的であれ、無意識的であれ、年長者から学び、年長者は責任感と指導力とをもつ。」ハイスクールの生徒が教師のアシスタントとして働くこともあった²¹⁾。

講堂では、生徒の研究発表、著名人を招いての講演、コンサートなどが行なわれる。表2にあるとおり、講堂の時間は多い。1年生から3年生まで、4年生から6年生まで、7年生から9年生まで、10年生以上、が、それぞれグループとして、交替に講堂を使う。通常は別々のクラス、学年の人々に講堂で同じ経験をさせ、生徒間の親しみを育てようとするのである。「講堂は純粋な学校コミュニティの舞台」と考えられていた²²⁾。

体育と遊戯も友愛精神を育成することを目的のひとつにしていった。1年生から4年生までは毎日2時間、5年生以上は毎日1時間がそれに割り当てられ、全授業時間数の24%を占め、たいへん多い（表2）。運動場、体育館などの設備はよく整えられており、この環境の中で、子どもたちは「自己統制、協力、勇気、自尊心、他人への配慮、正義感」を培う。そのために特にチームプレイが重視された²³⁾。

3. 自治の訓練

アメリカのコミュニティは、本来、住民の自治を不可欠の要素としていた。メイフラワー誓約書（1620年）以来の伝統である。ゲーリースクールでも、表面上は生徒に自治と政治参加の訓練を与えていた。

公民教育は、特別な時間を設けられておらず、教科書もない。その代わりに、生徒は講堂の時間を利用して自

ら、コミュニティ内の諸機関に出かけて、現場の人の話を聞いた²⁴⁾。

1910年に結成された少年村(Boyville)は、生徒が自発的に地域社会の改善にとりくもうとする試みであった。ゲーリー市内の10歳から18歳までのすべての男子は少年村の市民となって、政党を組織し、選挙を行なって、市長を選出し自治を行なった。エマーソン校の地下の一室が会議室と市長室になった。少年村の代議委員会は、条例を可決して、若者が空地をうろつくのをやめさせたことがあった。また、市議会に代表を派遣して意見を述べることも許されていた。しかし、少年村は1913年に廃止され、これに代わって自治の訓練のために、生徒会(Student Council)が、ネイティブのための学校であるエマーソン校に設立された。その生徒会憲章には「本会の目的は、生徒全体の活動を統轄し、学校精神を強め、学校の行なう努力の全ての面で高い水準を達成するように援助すること」が目的としてあげられた。少年村と違って、活動は校内に限られ、公民になる訓練と考えられるようになっていた²⁵⁾。

4. 実用性の重視

ゲーリースクールの目的のひとつに、学校を「自給自足コミュニティ」にすることがあった。そのために、子どももコミュニティを支える構成員として扱おうとした。だから、手工、作業、裁縫、産業教育など、どれも直接、子どもの実際生活と結びついている。靴修理、衣服づくり、机作り、学校での食事準備など、どれも現実子どもが必要とする時に行なう。

実際的な技術を教えるのはインストラクターである。学校は、実際の職人や料理人をインストラクターとして雇って、彼らに生徒の指導を依頼する。生徒が作った生産物はインストラクターの賃銀となる²⁶⁾。

以上のように、ゲーリースクールは生徒の親密性を増し、土地への愛着を育て、自治の訓練を行ない、子どもをコミュニティを支える構成員として育てていくことを目的としていた。

B. 学校と地域社会の連結

ゲーリースクールは、学校内でコミュニティ精神を育成しようとしていただけではない。学校が地域社会と密接に結びつき、地域のすべての人々に利用されていた²⁷⁾。具体的には、①開校時間の延長、②学校と家庭の結びつき、③学校機能の地域への開放、④アメリカンゼインション、の4点が特徴的である。以下順に見ていこう。

1. 開校時間の延長

ゲーリースクールは開校時間がたいへん長い。子どもをゲーリー市の悪い環境に放置しておくのではなく、なるべく長い時間、学校の管轄下に置いて、「よい」影響を与えようとしていたのである。既に述べたとおり、ゲーリーの授業時間数は平均的な学校より30%以上も多い(表2)。学校は朝8時15分から夕方6時まで開放されている。4時30分以後は運動場で遊ぶための時間である。土曜日、日曜日、夏休みにも学校が開かれた。強制ではないが、学業遅滞者は多く、これらに出席した。夏学校にはレクリエーションとして参加する生徒も多かった。

ゲーリーでは、夜間学校も開かれた。1914年には、エマーソン校は週4回、7時から9時30分まで開いた。夜、子どもが街路をうろつくのはよくないことだから、学校に居る方がよい、というワート教育長の考え方にもとづいていた。夜間学校は、成人教育の場としても有効であった²⁸⁾。

2. 家庭と学校の結びつき

どんな地域でも、学校が生徒の家庭から信頼を受けることは、学校運営上、必要なことであるが、住みよい「コミュニティ」をつくることを課題としていたゲーリーでは、このことはいっそう重要であった。

ゲーリースクールには登録教師制(Register Teacher)があった。子どもが入学した時に、自分のニックネーム、年齢、家族の資産などについて、細かく学校に報告する。また、街路、歩道、街灯柱、郵便ポスト等も記入した地図、家屋、納屋、物置、空地の使用状況を示す図を子どもが作る。担当の登録教師がこれらの情報を保管しておく。親はしばしば学校へ来て、子どもの作った地図を見ながら、地域の改善、引越し等を考える。子どもは地図などを参考にして、市のよい点、悪い点を話し合う。子どもは登録教師に月間報告書を提出する。登録教師制は、家庭と親との間に信頼関係をつくる基礎となるものだった²⁹⁾。

宗教の時間は親の意向に従う。ゲーリーには新移民が多いから、カソリックも多い。だから学校は宗教教育を強制せず、宗教の時間には子どもは教会、YMCA等へ出かけていった。どこで何をするかは親が予め指示したカードに従う。宗教は「家庭の管理下にあるべき」ことを、学校は十分承知していた。こうして、学校と家庭との宗教的なコンフリクトは避けることができた³⁰⁾。

3. 学校機能の地域への開放

学校は地域の文化センターであった。学校の講堂、運動場などは一般の人も使用することができた。グラウン

ドは「いつでも公園」と考えられていた。エマーソン校とフレーベル校の図書室は、公共図書館の分室として、運営された。学校内にある画廊や博物室では多くの一般市民も、芸術や文化財にふれることができた。市民にとって学校は「討論のための町会堂」であり、レクリエーションセンターでもあった³¹⁾。

生徒は学校から外へ出かけていくことも許されていた。生徒は、講堂と体育の時間を利用して、教会や音楽のレッスンなどに行った。「学校は子どもの時間を独占することを望まず、すべての児童福祉機関が同時に能率的に機能するように、学校が子どもの活動の情報交換所として働く」ことが計画されていた³²⁾。

4. アメリカニゼーション

ゲーリーには移民が多かった。市としては、コミュニティを創るために、彼らをアメリカナイズすることが重要な課題であり、学校はそのための有効な手段であった。

ゲーリー市には、他の多くの市とは違って、アメリカニゼーション委員会がない。アメリカニゼーションという語は、外国人グループに反感を惹き起こすこともあるので、市当局はその語をあえて使わなかった。ワート教育長は、アメリカニゼーションのための授業を「機会学級 (Opportunity Class)」と名づけ、教育を受けることがその人の成功の機会を増やす、ということを移民に確信させることをその目的とした。毎週5日間続けて夜間学級を開き、ネイティブも移民も一緒に英語、算数、綴字、公民、電気、体育などを学んだ。女子はこの他に、料理、手芸、家政、公衆衛生なども学んだ。皆で愛国的な歌をうたうこともよくあった³³⁾。

ゲーリープランは、多方面にわたる努力によって、学校を地域社会 (コミュニティ) と密接に連結し、住民の信頼を確保し、学校をコミュニティセンターにしようとしていた。市がいかに学校に大きな期待をかけていたかは、学校教育に投資した額の多さによっても知ることができる。(表3)

表3 出席者1人当りの費用

	Emerson	Froebel	Indiana	U.S.
Administrative and general service	\$10.05	\$ 8.48	\$ 0.93	\$ 1.01
Operation and maintenance	16.85	10.28	25.69	16.09
Instruction	47.74	33.61	25.15	24.60
Total	74.64	52.37	51.77 (47.91)	41.72

注1) Bachman/Bowman, pp.46-47; Report of the Commissioners of Education 1917

注2) インディアナ州内の人口25,000から10万の都市での費用を平均すれば47.91ドルとなる。

では、市のこの努力に対して、住民はどう反応したであろうか。本章の最後にそれを見てみよう。

C. 学校に対する住民の信頼

ゲーリースクールの子どもは、出席率がたいへんよい。表4はゲーリースクールの生徒の年間平均出席日数と出席率を、インディアナ州、合衆国全体のそれと、比較したものである。ゲーリーの出席率のよさが目立っている。ゲーリーではこの日数に加えて、土曜・日曜学校、夏学校に出席する数も多い。コーエンが最近行なったインタビューによっても、当時の小学生が皆喜んで学校に通っていたことが、確認されている³⁴⁾。

ゲーリーの市民も、学校を信頼していた。フレーベル校で1922年から13年間数学の教師をしていたある教師は、当時を回想して、「(親たちは) 子どもがフレーベルのような学校に通うことができたのを喜んでいて。……親たちはいつも私たちに感謝してくれ、『子どもたちが教育を受けることができるのは、ほんとうにすばらしいことだ』と語ったものだった³⁵⁾」と述べている。ワート教育長も「(ゲーリーの) 大人は、学校はあらゆる疑問に答えてくれると、学校を頼りにしている³⁶⁾」ということも、十分承知していた。

学校を利用する人数がゲーリーでは非常に多かったことは、学校がコミュニティセンターとしての機能をもつ

表4 在籍者の平均出席日数と出席率

	Gary	Indiana	U.S.
1911-12	126.1(86.8)	135.9(80.9)	115.6(73.2)
1912-13	125.5(85.8)	121.3(79.2)	115.6(73.2)
1913-14	142.3(89.9)	125.6(80.4)	117.8(74.5)
1914-15	137.2(90.4)	127.9(81.9)	121.2(76.1)
1915-16	146.4(89.4)	127.4(82.2)	120.9(75.5)

注1) Flexner/Bachman, op. cit. p.253, Report of Commissioners of Education, 1913-1917をもとに筆者が作成

表5 ゲーリーのひとつの学校の利用者とシカゴの11の公園の利用者との比較

	Total for Eleven Parks	One School
Population	800,000	20,000
First cost, less land	\$2,000,000.00	\$300,000.00
Annual Maintenance	\$ 440,000.00	\$100,000.00
Annual Attendance		
Indoor gymnasium	310,000	1,000,000
Shower baths	1,325,000	500,000
Outdoor gymnasium	2,000,000	2,000,000
Swimming pool	725,000	300,000
Assembly halls	270,000	1,000,000
Club rooms	70,000	50,000
Reading rooms	600,000	1,000,000
Lunch rooms	520,000	20,000

注1) Wirt: "Utilization of School Plant," op. cit. pp.61-62

ていたことを示している。表5は、1912年のゲーリーのひとつの学校の利用者数と、同年のシカゴの主要な11の公園利用者数の合計とを比較したものである。シカゴの $\frac{1}{40}$ の人口しかないゲーリーであるが、利用者数はあまり変わらない。夜間学校の利用者も多く、昼間の学校の出席者数を上回った年さえあった³⁷⁾。

ゲーリーの教育委員会、教師、教育長も、相互に利害が衝突することはほとんどなかった。ゲーリーの地元の新聞 Gary Post-Tribune の1938年の記事には、「事実として、われわれ(ゲーリー市民)は、教育委員会、教育長、および教師の利害はひとつであったと、つねに感じていた。過去30年間の記録を見れば、このことを信ずるようになるのは確実である³⁸⁾」との記述がみられる。

ワート教育長と学校当局は、学校が積極的にコミュニティの建設に努力しているように、住民に理解させ、住民の信頼を得ることに成功していたのである。だがそのことは住民が無批判に学校を信ずる危険性をも、生みだしていた。

Ⅲ. ゲーリースクールの実態

ゲーリースクールが住民の強い信頼を受けていたことは事実であるが、そのことは、ゲーリープランが教育実践として優れていたことを保証しない。ゲーリースクールがコミュニティを建設しようとした努力は、その反面で新たな問題を生みだしていた。本章では、ゲーリープ

ランの問題点を検討していく。

A. 管理・運営上の諸問題

ゲーリープランの中で、最も批判の集まったのは、設備の不適切さと生徒指導の不徹底とであった。

ゲーリースクールの設備は、外見はよく整っていた。しかし細かく見ると、不適切な箇所が少なくなかった。異なった年齢、学年の生徒が同じ教室、机、いすなどを使うことも多いのに、すべて同じ大きさだから、子どもの体格に合わない。ゴミ処理、換気、照明も不十分だった。黒板の字も机の上のテキストも、暗くて読めない教室さえあった³⁹⁾。

教師は生徒がどの授業に出ているかを、把握していなかった。生徒は各自のプログラムカードに従うことになっており、出席する授業を変える際には、登録教師から「授業変更許可証」を受けなければならなかった。しかし、許可を受けずに、アカデミックな科目を嫌って、作業や体育の授業に出る生徒は多かった⁴⁰⁾。教師にとっても、毎時間の生徒の動きを正確につかむことは、容易ではないだろう。

教師が生徒ひとりひとりを把握できなかったのは、教科担当制がひとつの原因であろう。ハイスクールでの教科担当制は、全国的には珍しいことではない。しかしゲーリーでは、小学校4年生から始めたという点で、全国の注目をひいた。この方式だと、例えば、7年生と8年生は、8人から10人の教師に教わり、1人の教師は数百人の子どもを教える。教科担当制では、教育の効果をあげるために教師間の話し合いが必要なのは当然であった。ゲーリーでも教科主任を中心とした会議が学校終了後開かれることがあった。だがその内容は全く事務的なことに終始し、教育の目標や、個人の成績などについては、ほとんど話されなかった⁴¹⁾。教師は教育よりも学校運営の方に関心を向けざるをえなかったのである。

教師は、教科と教科の関連には注意を払わず、道具教科は子どもの活動や経験とは無関係に教えられた。その内容や方法も伝統的学校とほとんど変わっていなかった⁴²⁾。子どもがアカデミックな科目を嫌ったのは、このためでもあっただろう。

ゲーリースクールは、合理的管理を特色としていた。市は学校に多額の投資をし、中でも管理費は多かった。それにもかかわらず、学校の管理・運営はうまくいっていなかった。この弱点は必然的にゲーリースクールのもうひとつの欠陥を生みだしていた。ゲーリーの生徒は学力が著しく劣っていたのである。次にその実態を見てみよう。

B. 教育的効果

ゲーリースクールの子どもは、しばしば、3R'sなどの基礎教科に弱いと批判された。その実態については、S. A. コーティスが詳しく分析している⁴³⁾。3R'sに費される時間は、ゲーリーでは特に少ない、ということはない。しかし、ゲーリーの子どもは連想能力、音読能力、綴字能力、書き方能力、いずれも著しく弱かった。例えば、エアーズスタンダードによる綴字テストでは、全国平均より20%も点数が低かった。書き方をエアーズハンドライティングスケールで見ると、ゲーリーの子どもは、書くのは早いけれども字は下手であった。読むのは遅くて間違いが多い。計算も遅くて間違いは多い。ゲーリーの子どもは、3R'sのいずれにも弱かったのである⁴⁴⁾。

ゲーリーには移民が多く、人口の流動性が大きいことを考慮すれば、低学力の原因がすべてゲーリープランにあると断定することはできない。しかし、ゲーリースクールに入学した生徒には年齢どおり進学できない学業遅滞者になる者が多かった(表6)。ゲーリープランが何の効果もあげていなかったと言うことはできる。

表6 年齢と学年

under age 28%	normal age 48%	over age 24%	入学時 現在
under age 22%	normal age 40%	over age 38%	

注1) Flexner/Bachman: op. cit. p. 186

特別教科に費される時間は、ゲーリーでは、一般の学校より大幅に多い(表2)。産業教育や作業は、単なる技能の訓練ではなく、その教科の一般的知識とともに学ばれるはずであった。しかし、リチャーズの調査によれば、子どもは手先の技能には優れていても、その基礎となる知識には全く弱いことが、判明した⁴⁵⁾。その原因の第一は、インストラクターが有能な技術者を捜すことに熱中し、生徒を教育することには関心をもたなかったことにあった。第二は、ヘルパーが十分な指導を受けていなかったことである。年長者は年少者を邪魔者扱いにし、年少者は「不注意、時間の浪費、無責任」の習慣をつけているだけであった。第三は、あまりに現実の要求に応じようとしていたために、仕事の領域が狭く、極端に経験的な方法にかたよっていたことにあった⁴⁶⁾。

体育も、講堂での学習も、望ましい効果は上げていなかった。年齢の異なった生徒を寄せ集めたことが、指導を難しくしていた。体育では、1教師が1時間に、1年

生から8年生までの150人を同時に教えなければならなかった。そのため教師の指導はゆきとどかず、生徒は好んで自由遊戯を行なったが、それは、目的もなく走り回ることであった⁴⁷⁾。講堂で映画があっても、年長の者にはやさしすぎ、年少の者には難しすぎ、しかも教師は何の説明もしようとしなかった⁴⁸⁾。体育も講堂も、教師の適切な指導を欠いていた⁴⁹⁾。

以上のことから、ゲーリープランは何ら望ましい教育効果を上げていなかったと言える。しかもそれは、偶然起こったことではなく、プランの本質から必然的に生じたものと見なければならぬ。

IV. ゲーリースクールの評価

ゲーリー市は、市財政は貧しく、移民が多い、無秩序な新興産業都市であった。この町を住みよい「コミュニティ」にすることが市の緊急の課題であり、公立学校の重要な目的のひとつであった。

ゲーリースクールの第一の特徴は、教育改革が都市改革の一部として行なわれ、積極的にコミュニティ建設をめざしたことである。学校では教育内容を地域の生活と密接に結びつけて地域への愛着を育て、生徒間の友愛の情を育成し、生徒がすぐに地域の一員として活躍できるように、実用的な教育を行なった。それとともに、移民のアメリカニゼーションをすすめ、地域のコンフリクトを和らげようと努めた。学校は地域社会に対しては、コミュニティセンターであって、広く一般に開放され、レクリエーションや話し合いの場であった。市は貧しい財政の中でも、学校へは積極的に投資した。市民は、市が用意してくれた学校施設を利用することで、労せずして、コミュニティの一員であることを感じる事ができた。

ところが、こうして作られたのは、正しい意味のコミュニティではなかった。アメリカの伝統的コミュニティの重要な要素であった住民自治が確保されていなかったからである。ゲーリーは、住民自治を欠いた統制的な「コミュニティ」にすぎず、したがって学校の建設も都市の建設と同じように、U.S.スチールと政治家によってなされた。彼らにとって学校は市に秩序を創り出し、移民をアメリカナイズするための手段にすぎなかった。住民が学校に対して強い信頼をもっていたために、学校はいっそう有効に秩序の形成に寄与することができた。

ゲーリースクールの第二の特徴は、学校教育がすべて、行政的立場から進められたために、子どもひとりひとりへの着目がまるでなかったことである。ゲーリース

クールには、子どもを悪い環境から救う、という動機は確かにあった。しかし目的はつねに、コミュニティの秩序をつくることであって、児童ひとりひとりの心理には注目しなかった。たとえば、Aという生徒が、アカデミック科目、講堂、運動場へと動く。Bという生徒が、講堂、運動場、アカデミック科目へと動く。それぞれ、なぜこの順に動くのか、科学的な根拠は全くなかった。すべて管理者の都合にすぎない。すぐれた学校設備も、子どものひとりひとりの体格を考慮していなかった。学校は生徒の管理には神経を使ったが、生徒の教育には無関心であったと、言うことができる。

第三の特徴は、カリキュラムが多様化され地域と密接に結びついてきたが、整理されていなかったことである。「働き・学び・遊ぶ学校」とも言われたゲーリースクールは、そのすべてをカリキュラムにもりこんだ。しかし、その拡大カリキュラムをどう編成し、実際の授業はどう行なうのか、検討されていなかった。教育が効果をあげるためには、教科と教科の関連、学年の連結性、教育方法の改良などが研究されるべきであった。これらの点では、ゲーリースクールの成果は少なかった。

おわりに

ゲーリースクールは、伝統的な学校教育の方法——暗誦中心、固定された机、子どもの経験とかけ離れた教育内容——を根底から覆し、学校が社会改革の手段たりうることを示した点で、学校教育の新しい可能性を切り開いた。しかし、ゲーリースクールが現実になしえたことは、住民自治のない、「統制的コミュニティ」の建設と確保にすぎなかった。学校が何らすぐれた教育効果もあげていなかったのにもかかわらず、子どもも地域住民も、学校に対して全幅の信頼をおいた。彼らにとっては、学校が地域の生活の改善をなしえているかのように思われたからである。

しかし、現代のわれわれは、ゲーリースクールが失敗であったとして、単に否定してしまってはならない。ゲーリースクールが新しく開いた学校教育の可能性と、それが直面した困難とを、もう一度考えなおしてみることが必要である。ゲーリースクールの歴史から、われわれが学ばねばならぬことは多い。

(指導教官・宮沢康人助教授)

注

- 1) Dewey, John/Dewey, Evelyn: *Schools of To-morrow* (New York: 1915) p185.
- 2) Burriss, W.P.: *The Public School System in Gray,*

Indiana (U.S. Bureau of Education Bulletin, 1914, No. 18); Barrows, Alice: *First National Conference on the Work-Study-Play or Platoon Plan* (U.S. Bureau of Education Bulletin, 1922, No.35)

- 3) Barrows: op. cit. p.3.
- 4) 田中廣吉『ゲーリー式の学校』(大阪屋号 1918年); 阿部重孝『学校教育論』(1930年) 著作集第2巻所収(1983)
- 5) O'Neil, William L.: *The Progressive Years* (New York, 1975) など参照。なおゲーリースクールを扱った雑誌記事の数は、1915—1918年に76編、1919—1921年に4編、1922—1924年に4編であった。(Reader's Guide to Periodical Literature による。)
- 6) アメリカ史におけるコミュニティの原型は、ニューイングランド植民地にある。住民の人種的、宗教的、経済的同質性、住民相互の親密性、住民自治を基礎としていた。コミュニティは住民の心の拠り所であった。この自然なコミュニティは、19世紀末からの交通の発達、人口の都市への集中、大衆消費社会の出現とともに、衰退していった。進歩主義教育は、この衰退しつつあるコミュニティを、新たな形で再生させていこうとする努力に他ならなかった。Bender, Thomas: *Community and Social Change in America* (Rutgers University Pr., 1978); Bower, S.E.: "The Child, the School, and the Progressive Educational Concept of Community, 1890—1920," (Indiana Univ., 1980)
- 7) Bourne, R.S.: "Really Public Schools," *The New Republic* (April 10, 1915) p.259.
- 8) Wirt: cit. in Barrows: "The Work-Play-Study or Balanced-Load Plan," *The New Republic* (Nov. 12, 1924) p.16.
- 9) 大田堯『近代教育とリアリズム』(福村書店, 1949年) 146—150頁; 笠原克博「The Gary Plan—教育内容拡大についての問題」『九州大学産業労働研究所報』第50号, 51号(1970年); 杉峰英憲「社会改革としての公立学校構想——ゲーリースクールの理論と実践をめぐって」『奈良女子大学文学部研究年報』24 (1980年) 67—86頁
- 10) Cremin, L.A.: *The Transformation of the School* (Knopf, 1961) p.155; Callahan, R.E.: *Education and the Cult of Efficiency* (U. of Chicago Pr., 1962) pp. 126—147.
- 11) Cohen, R.D./Mohl, R.A.: *The Paradox of Progressive Education: The Gary Plan and Urban Schooling* (Kennikat, 1979)
- 12) ゲーリー市の歴史については、主に以下の文献による。Lane, James B.: "City of the Century," *A History of Gary, Indiana* (Indiana U.P., 1978); Mohl, R.A./Betten, N.: "The Failure of Industrial City Planning: Gary, Indiana, 1906—1910," *Journal of the American Institute of Planners* Vol. 38 (July, 1972) pp. 203—15; Mohl/Betten: "Paternalism and Pluralism: Immigrants and Social Welfare in Gary, Indiana, 1906—1940," *American Studies* (Kansas U.) Vol. 15 (Spring, 1974) pp. 5—30.
- 13) Cohen/Mohl: op. cit. pp. 11—12.
- 14) Flexner, Abraham/Bachman, Frank P.: *The Gary Schools: A General Account* (New York: General Education Board, 1918) pp. 13 ff.
- 15) Burriss: op. cit. p.11.
- 16) Fernandez, Alice Barrows: "The Meaning of the Wirt Plan," *The New Republic* (July 1, 1916) p.221.
- 17) Wirt: "Utilization of School Plant," *Proceedings o,*

- Conference of Charities and Correction* (1912) p.62.
- 18) Cohen/Mohl: op. cit. ch. 4; Sternberger, F.M.: "Gary and the Foreigner's Opportunity," *Survey*, Vol. 42 (June 28, 1919) pp. 480-82.
- 19) Bourne, R.S.: *The Gary Schools* pp. 114-19; Chadwick, R.D.: "Vitalizing the History Work," *History Teachers' Magazine* Vol. VI, No. 4 (April, 1915) pp. 112-121.
- 20) Coons, C.S.: "The Teaching of Science in the Gary Schools," *School and Society* Vol. I, No. 16 (April 17, 1915) pp. 546-552.
- 21) Bourne: "Apprentices to the School," *The New Republic* (April 24, 1915) p.302; Flexner/Bachman: op. cit. pp. 65, 162-35.
- 22) Bourne: *The Gary Schools* pp. 51 f; Flexner/Bachman: op. cit. pp. 162-64.
- 23) Hanmer, Lee F.: *The Gary Public Schools: Physical Training and Play* (New York: General Education Board, 1918)
- 24) Dealey, William L.: "The Theoretical Gary," *Pedagogical Seminary* Vol. 23 (June, 1916) p.278; Dewey: op. cit. pp. 176 ff
- 25) Chadwick: op. cit. pp. 117-19; Bourne: *The Gary Schools* p.138; Burris: op. cit. pp. 26-27.
- 26) Richards, C.R.: *The Gary Public Schools: Industrial Work* (New York: General Education Board, 1918) pp. 111-123.
- 27) 地域社会は、Community の訳語であるが、本論文では、地域社会とコミュニティとを区別して用いている。即ち、コミュニティとは、アメリカの伝統的コミュニティであり、1910年代には、理念としてしか存在しえなかった。地域社会とは、この時代に現実に存在していた社会をさしている。コミュニティは理念であり、地域社会は現実のものである。英語ではこの両者が区別されなかったところに、ゲーリースクールの失敗の原因のひとつがあった。理念の上でしか存在しないものを、現実に存在するもののように、住民は思いこんだからである。
- 28) Bobbit, J.F.: "Elimination of Waste in Education," *Elementary School Teacher* Vol. 12 (Feb., 1912) pp. 259-71.
- 29) Ueland, E.: "The Teacher and the Gary Plan," *The New Republic* (July 1, 1916) pp. 219-221; Bourne: op. cit. p.97.
- 30) Wirt: "The Gary Public Schools and the Churches," *Religious Education* Vol. 11, No. 3 (June, 1916) pp. 221-222.
- 31) Taylor, G.R.: *Satellite Cities: A Study of Industrial Suburbs* (New York, 1915; Rep. 1970. Arno Pr.) pp. 222-23; Bourne: op. cit. pp. 20, 25-26.
- 32) Wirt: "Ways and Means for a Closer Union Between the School and the Non-school Activities," *NEA: Addresses and Proceedings* (1923) p.446; Bourne: op. cit. p. 53.
- 33) Sternberger, F.M.: op. cit. pp. 480-82.
- 34) Amid, John: "Some Children Have All the Luck: Interview," *Collier's* Vol. 73 (Feb. 9, 1924) p.15; Barrows: "The Work-Play-Study," pp. 16-17; Washburne, C.W./Stearns, M.M.: *Better Schools: A Survey of Progressive Education in American Public Schools* (1928) p.248; A letter from R.D. Cohen to the writer (Nov. 1981)
- 35) Elwell, R.: "Gary Plan Revised," *American Education* Vol. 12, (July, 1976) p.22.
- 36) "Public Schools," *Nation* (Sep. 9, 1915) p.326.
- 37) Cohen/Mohl: op. cit. p.179.
- 38) Cit. in Cohen/Mohl: op. cit. p.148.
- 39) Putman, J.H.: "Modern Educational Movement," *Educational Review* Vol. 55 (April, 1918) pp. 284-93; Swift, F.H.: "Impressions of the Gary School System," *Educational Administration and Supervision*, Vol. 2 (Oct., 1916) pp. 508-510; Strayer, G.D./Bachman, F.P.: *The Gary Public Schools: Organization and Administration* (New York: General Education Board, 1918) pp. 97-98.
- 40) Strayer/Bachman: op. cit. pp. 102-107.
- 41) Ibid. pp.89-98.
- 42) Bonser, F.G.: "Reasons for My Objections to the Platoon Plan," *Teachers College Record* Vol. 27, No. 4 (Dec., 1925) pp. 306-310 Flexner/Bachman: op. cit. ch. VII.
- 43) Courtis, Stuart A.: *The Gary Public Schools: Measurement of Classroom Product* (New York: General Education Board, 1919)
- 44) Ibid. chs. III-VII.
- 45) Richards: op. cit. pp. 112-13; Flexner/Bachman: op. cit. pp. 129-32.
- 46) Flexner/Bachman: op. cit. pp. 129-32; Caldwell, Otis: *The Gary Public Schools: Science Teaching* (New York: General Education Board, 1919) pp. 121-22, 27; Richards: op. cit. pp. 112-113.
- 47) Hanmer, Lee F.: op. cit. 18 ff
- 48) Flexner/Bachman: ch. 13.
- 49) 体育と講堂のそれぞれの専門教師のうち、 $\frac{3}{4}$ が全く大学教育も師範教育も受けていず、ゲーリーの中でも、質の悪い教師が雇われていたことが、ひとつの原因であったとみることもできる。ゲーリープランの中で最も重視されていたはずの体育と講堂の授業に対して、質の悪い教師しか雇われなかったとすれば、それは、体育と講堂の教育的意義を正当には評価していなかったことになるだろう。Flexner/Bachman: op. cit. p.238.